「にごりえ」一視点
―「お力」と「お初」の位相―

木村　真佐幸

一

一葉の作品中、「にごりえ」はいろいろと問題の多い作品であることは、夙に和田芳恵氏の「未定稿『にごりえ』の発見と研究」（三田文学・昭和17・12～18・10）、そして関良一氏の「『にごりえ』考」（文学・昭和29・7）等によって指摘されてきたところである。すなわちそれは、[1]松坂俊夫氏が説くように、「『にごりえ』は、構成・内容においていくつかの矛盾があり、えがき足りない部分もけっして少なくなかったが、題材と作品の間に烈しい一葉の詩情が流れ、それがリアルな描写とあいまって、他の作品にはみられない迫力となっている」と、その構成・内容上の破綻を指摘しつつも、なおそれを補って余りある「リアリティ」と「迫真性」が強調され、その意味では「『にごりえ』は『たけくらべ』と見合って一葉における己れの宿命との対決の物語」（蒲生芳郎「一葉の日記」試論・文芸研究・第三十七号・一九六一・三）とみられてきたのが大方の「にごりえ」評といってよかった。

しかし、近年、この「にごりえ」の問題点が多面的に構造的に分析され、視点を変えた指摘がめだってきた。例えば岡保生氏は、「『にごりえ』は『たけくらべ』と並称される代表作であるにもかかわらず、作品としては破綻があり、問題として指摘される箇所がある」（「お力の死―『にごりえ』ノートから」・「学苑」昭和45・11）と、従来からの問題点を再度疑問視した上で「お力」の死をめぐっての精緻な分析を試みている。すなわち岡氏は、「謎の女」ともいえる「お力」の「内面性」にメスを入れ、第五章後半でいう「絶望的なお力の姿」は否定できないとしても、「死を決するところまで行っていない」とみる。では、何故の心中か―ここで未定稿「無題二十二」との関連・そして作品執筆の経緯を辿りながら、「お力」がやがて己れの内面に巣くう「女の業のふかさ」の自覚に到達し、「わが心の深淵をのぞき見」「わが運命のすでに袋小路の中におちこんでしまっていることを察知したのではなかったか…」と追及する。また、助川徳是氏も、「『にごりえ』は誠にわからない名作である、先学の人々が、この『わからなさ』について一言もされないのは、更に理解に苦しむ」（「お力の物思い」、日本近代文学会九州支部会報6号・昭和43・3・31）と、「一つの代表的疑義」として問題提起している。つまり、「お力の心中の秘密」は何か―に視点をおき、その「崩壊した心理」ながらも「お力」は「明らかに生きよう」としていると見、このことは「矢張り私も丸木橋を渡らずばなるまい」の中に、「的確な意味は実につかみがたい」点はあるにせよ、「とにかく生きがたい生を生き抜こうとする彼女の気迫は響いてくる」ととり、結局、生きねばならぬ「ある奇怪な想念が彼女を捉えて」いるとみる。ではその「お力の物思い」、つまり生を首肯すべき原点とは何か―結論のみを紹介すると、それは「社会変革への志向」がすなわちそれであり、その

「可能な社会変革の道」は、「金満家の嫖客に遭遇して、何らかの手段によってその財を私し、その財を以て、思う儘なる生を営むことではなかったか…」と論断する。氏の論は、従来の「にごりえ」論の盲点を衝いたという意味で卓見である。しかし、さらにその「志向」の具体的意図は一体何であったのか…もちろん、この断定は困難ではある。だが、ここまでの視点と立論から、その体現すべき〝手段〟は肯定できるとしても、もう一歩、その先を伺いたかった。「支部会報」という性格から、まず紙幅をはじめ、種々の制約は想像できるが、とにかく是非この卓論の発展を切って希ってやまないものである。

ところで、私も一葉の生涯における一つの危機―ともいえる久佐賀義孝問題を追及していく中に、一葉は己れの〝大望〟の実現―つまり、小説（しかも大作）をもって「天下国家」を論じる、そんな気負いにも似た悲壮的心情がはげしく胎動していたことを痛感した。だが、一方、現実問題としての方途は逼塞状態に近いこともこの悲壮観をより煽っていたことも見逃すことができない。したがってこの苦悩の救済と脱出のため日々、いわゆる〝借金哲学〟として己れの意図と行為を正当化した〝金策〟も、所詮、〝出世払い〟であり、他力本願に他ならなかった。この辺の事情については、拙稿「一葉後期文学の原点―久佐賀義孝問題の再検討―」（藤女子大学国文学雑誌第十三号、昭和48・3）や、「大つごもり」（解釈と鑑賞・昭和49・11）、「『大つごもり』成立の背景―『後の事しりたや』一視点―」（札幌大学紀要第七号・昭和50・3）等で若干ふれたのでここでは重複を避けたいと思う。

いま一つ、新しい視点に立つユニークな説をあげねばなるまい。それは前田愛氏の「『にごりえ』の世界」（立教日本文学第二十六号）である。氏は、「お力」の身の上話そのものには、たしかに「合理的解釈では割り切れない剰余が残ることもまた事実」と容認した上で、第六章になってなお、「お力がはじめて結城の身の上を語る動機を、菊の井を飛び出してから彼女を襲うた錯乱状態の反動とする心理的解釈も、一面の真実をいいあてているにすぎない」と指摘し、さらに「あるいはその解き口は『にごりえ』をその写実的・社会的な傾向の作家とする一般的な理解をいちど裏がえしてみるところに求められるのではあるまいか。いいかえればお寺の山に人魂が飛びめぐるという結末に象徴される非合理的な世界、現実を顛倒した反世界として『にごりえ』を把握して行く方向である」（同上）といった従来説を基本的に揺るがす論を以って波紋を起している。

前田氏は、「にごりえ」第五章における「お力は一散に家を出て」以下に描かれる「お力」の錯乱ともみえる行動・心理について、[2]塚田満江氏や浜本春江氏説[3]を一つの側面として評価しつつも、両氏は、結局「お力の内的独白なるものがその心理過程の直接的な表現であるという前提のもとの分析」に他ならず、ここにその「前提じたいに検証を加える必要」を提示しながら、「この個所を正常な心理の描写としてよりも、異常心理の記述」とみ、その意味では「お力の内的独白そのものに包含されているさまざまな歪み、倒錯、不条理こそ、彼女の心理過程の解明へ」の「有効な鍵」とみるのである。そして、この第五章後半の「お力」の「心理」を「異常心理」とする描写のしかたは、結局、作者一葉自身の「姿勢を示唆するもの」と

とる。つまり、明治二十五年の夏ごろからの一葉には、「頭痛」「脳の痛み」「例の脳病」「かしらなやましくて」等の語句の散見のきわだつ点を重視し、さらに「きのふは他人にして、今日は胸友たり、今日の親友、あすの何ならん、花は散るべきものとさだめて、猶暮春の恨みたれもありぬべき事、こよひの会合をしばらくしるして袖の涙の料にとたくはへぬ。」(明治二十八年五月十日の日記)や、また、「天地とこしなへにありといへども一度此土をさりし物、二度現世にあらはるゝ事きかず。……他界に対する観念といふもの、そも〳〵此土に何の功あらんや」(日記断片その四)、加えて従兄幸作事件から一葉にとって、「他界の観念があったとするならば、それは菊の井を飛び出したお力が魅かれて行く虚無の空間、死者たちの世界に象徴されるものであった」し、第五回後半に「精写されたお力の異常心理」は、「一葉がその精神の奥処でひそかに養っていた宿命へのおののき、生の脱落感、無気味な死の予感と造型する方法だった」と前田氏は強調し、さらに補足して「にごりえ」執筆中に一葉が父の七回忌を迎えていることから、「盂蘭盆の七月十六日に、お力が死者たちの幻影にとらえられる『にごりえ』の設定が、亡父の鎮魂の行事を踏まえているという想像は大胆にすぎるであろうか」と論断している。

以上のように、「お力」の「異常心理」の延長線上に再度登場する結城朝之助も、結果的には「お力にとって結城は地上の世界の住人」でしかなく、それに反して「源七はお力と同じ奈落の世界の住人」となるわけで、氏はさらに「にごりえ」の結末についても、「結城との隔絶を確認したお力と、お初と太吉から見放された源七とが、どのような死にざまを迎えたかは私の関心の外」であり、「無理心中か、合意の心中かという問題設定も無用の詮索」で、肝腎なのは「二人の死体が、冷やかな第三者の噂話によって葬送されたという事実」で、そういう意味では「お力と源七は彼岸の救済を約束されているわけでもなく、生き残った者たちの鎮魂の対象ですらなく」、つまるところ、「死者の霊を生前の世界へと迎えとる盆提灯がまだ軒先に灯っている季節に、お力と源七がこのように死の手にとられてしまうところに、『にごりえ』のもつとも深いアイロニーがあり」、そのかぎりで「人魂の光がお寺の山を飛びめぐるという草双紙ふうのどぎつい結末は、この不条理な死を閉ざす封印としてきわめて適切」と氏は結ぶのである。

前田氏の説を私の管見に従がって勝手に要約したことに責を負わねばならぬが、ともかく現時点における「にごりえ」論としては、示唆に富む特筆すべきものであるだけにためらいもなく紹介させていただいた。しかし、以上の前田氏の特に結末に対する論への異説として蒲生芳郎氏の卓越した論文がある。氏は『にごりえ』の結末小考―『にごりえ』論のための覚え書き―(「日本文学ノート」十号・昭和50・3・宮城女子大日本文学会発行)の結びで、「お力」の「死」は、様々の問題は存在するとしても、「作者の意図としては、」生きることを願いながら非業に死んだうら若い女の無量のうらみ、その晴れるかたなき怨念の形象化にほかならぬ」とし、「お力は、滅びの淵からさしのべられた源七の手、その誘いに応えて死んだのではない。その手をしも振り切ろうとして源七の刃に『後袈裟』に斬られた死んだ」のであり、したがって、「こういうお力の死―悲劇[4]

的な結末の真相を抜きにして、トータルな『にごりえ』論は成り立たぬ」と一つの視座を確認している。

二

以上、紹介してきた「にごりえ」に関するユニークな数多い論は、何れも「お力」を軸に「結城朝之助」、そして「源七」の関係を視点として論じられてきた。むろん、それらは作品構造という面からも当然の帰結であり、否定されるべき性質のものではない。かくいう私も[5]「一葉文学にあらわれた女性像」や、[6]「一葉文学における近代的自我―『にごりえ』、『十三夜』を中心に―」…近くは「一葉後期文学の一側面―久佐賀義孝問題の再検討―」などにおいても、同様な視点であった。しかし、先にも触れたように、ここ数年、特に久佐賀問題を中心に、一葉後期文学の原点は何か―を調査検討している中に、先の諸説、中でも前田氏の精緻な分析を以ってする論証から多くの示唆は受けたものの、やはり一葉自身の逼迫した現実とそれに伴う諸問題は、陰に陽に一葉の作品に生々しく投影せずにはおられなかったとみる。その意味では、一葉の日記はもとより、小説においても「一葉文学の私小説性」(松坂俊夫氏)は否定することはできない。この点、特に後期の作品において一葉は、己れの切実な現実体験を基調としながらこれを作品の中に生かしていく―否、生かさざるを得なかったのであり、しかもこれが普遍性に迫るといったものが顕著であり、かつ迫力があることは周知の通りである。松坂氏が既に指摘されるように、「たけくらべ」以前の作品の主人公は、美しい独身の女性であり、かつては相応の身分の出であったものがいまは零落し、しかも孤児となり、そこに親娘二代にまたがる運命的悲劇が主題でもあった。これに対して「たけくらべ」以後、つまり、「にごりえ」からは主人公が〝人妻〟に代わり、係累関係も親娘、そしてその子と三代にまつわり、しかも現実生活の中から種々様々な苦悩と葛藤に悶える性格悲劇に移行していくことになる。つまりこれは、一葉を取りまく生活環境と諸々の周辺状況が、避けて通ることのできない人間関係を中心として彼女の前に立ちはだかっていたことを意味するし、また一葉自身もこれらの諸条件や隘路に対し、回避したり、昇華したり、観念の中で拡散させるのではなく、結果はともあれ、とにかく真正面から渉り合って生きていかねばならぬというリアリティの必然性を痛感し、胸中密かに期するものがあった事実を見逃すことはできない。例えば、一葉が久佐賀義孝訪問の前々日(明治27・2・21)の日記に、たった一言、「かみあらい…」と、変哲のない日常性の一コマを書きつけたり、さらに訪問当日の日記(明治27・2・23)に、「うきよに捨てものの一身を、何処の流にか投げこむべき…」、また、同年三月の項にも、「わがかばねは野外にすてられ、やせ犬のゑじきにならんと期す…」といった、いわゆる「捨て身」の戦法ともいえる一葉の悲壮的苦悶に裏づけられた決意のことばが日記の各所に散見される。だが、逆説的にはこれらは何としても生きねばならぬという「生の肯定」をめざす、己れへの強力な叱咤鼓舞の姿勢とも読みとることができるのではなかろうか―。したがって、そうであるだけに是が非でも渡らねばならぬ現実という〝丸木橋〟の前に立って心の句読点を省みる時、前田氏の説く「精神の奥所」にひそむ「宿命のおののき」や「生の脱落感」

そして「無気味な死の予感」が「亡父の鎮魂」と相俟って一葉の現実否定の意識へと傾斜していったとも考えられるが、しかし、この「生への希求」と「他界への志向」の両極が複雑に絡み合いながら後期の一葉文学の一側面を形成し、さらにこれを「生への希求という視点に立って「にごりえ」と照射する時、鮮烈に浮き彫りされてくるのは「お力」というよりむしろ「お初」そのものではなかったか—。しかるに、従来、この脇役的存在である「お初」は何故か軽視されてきた。その中で、比較的、この「お初」に着目した論文は、管見によれば小野芙紗子氏の「樋口一葉」(清水書院)と、浜本春江氏の「樋口一葉研究—『にごりえ』を中心にして」(名古屋大学「国語国文学」第二十四号・昭和44・7)塚田満江氏の諸論文といったところであろうか—。

先にも述べたように、たしかにこの「お初」は脇役的存在であり、作品に登場する量的比率からみれば僅かである。しかし、脇役は時には主役以上に質的に重要であり、その作品の成功か否かは、この脇役のめだたぬ〝活躍〟如何…ということも大いにあり得る。例えば「たけくらべ」の主人公ともいえる「藤本信如」は、ほとんどといってよいほど作品の表面にはでてこない。しかし、絶えず底流して作品の流れを軌道修正し、「たけくらべ」の「抒情性」と「悲哀感」をより濃厚にかもし出している操舵者は、まぎれもなく「信如」そのものであったはずである。してみると「にごりえ」における脇役「お初」像を、ここに再吟味することはあながち無意味な作業とは思われない。ましてや、一葉後期文学の系譜の中で、主人公が〝人妻〟へと移行しつつある点からも考え合わせて、やはり、一考に価すると思わざるを得ない。ただ、「お力」の、韜晦して何か一貫しない述懐や、「源七」との心中の根拠、はては町の噂と尾を引く人魂に眩惑されて—もちろん、これらと軽視してよいといっているのではない—必死に生きようとする「お初」の存在が死角に入ってしまいはせぬか—言ってみればこの脇役的存在の「お初」を強調したかったのである。

以上、いささか牽強付会を承知の上で「にごりえ」における「お初」の位置と役割を「お力」との対比の上で再検討していくことにしたい。

三

明治時代における、いわゆる「良妻賢母」の概念を、福地重孝氏の「近代日本女性史」(雪華社・昭和48・3)に求めると、「良妻」とは、「夫に貞淑にして従順」かつ「隷属」する「節婦」であり、夫は職場、すなわち「社会的」に活躍し、女は「家庭」にあり、あくまでも「夫を中心」とする「内助の地位」といったもので、換言すると女性の社会的な自覚を封鎖し、「家長権の絶大」の「家族主義」の中に埋没させることを意味していた。

さて、「にごりえ」の中で「お初」が登場するのは、第四章と第七章である。既に述べたように、量的には決して多いとは言えないが、作品展開の上からは極めて重要な章に他ならない。まず、第四章であるが、この章における「お初」は、先に述べた明治時代の「良妻賢母の「良妻」の典型ともいえるものである。しかし、この「お初」は窮極的には、「太吉」を連れて家を出て行かねばならない。しかも、

「お初」の前途には自らの手による生計の確立と、「太吉」の養育……という二つの重大な責務が横たわっている。ここには観念的な美風としての「良妻賢母」の概念はあてはまらない。生活の糧を求めることが何よりも優先する。一葉の生活の実態と意識を仮借なく解剖すると、そこには生きることに必死に喘ぐ「お初」像とものの見事にオーバラップする。この点については後述するとしても、とにかく第四章の「お初」の描写はみごとというより外はない。「貧にやつれたれば七つも年の多く見え」るが、「洗いざらしの鳴海の浴衣」を「前と後を切りかえて膝のあたりは目立たぬように小針のつぎ当」、しかも「帯きり、と締め」る「お初」の容姿は、一葉が明治二十七年二月二日、年始（実際は金策）に出かける時の姿が日記に生々しく描かれているのと符合する。すなわち、着物というのは、「塵ほども残らずよその蔵にあづけたれば、仮そめに出んとするもの」もなく、「邦子の、からうじて背中と前袖をゑりさま〳〵にはぎ合せて、羽をりだにきたらましかば、ふとは、はぎ物とも覚えざる様に小袖一かさねこしらへ出てたり…」云々とあるように、外出時しかも年始？においてさえこのようであって見れば、日常生活は想像に余りあろう。

ところで、「お初」は、「お力」に心奪ばわれて生活意欲を失なった夫「源七」の帰宅に対し、まずはやさしいことばを以って迎え、行水と洗い晒しの浴衣を用意、膳ははげかかって足はよろめく「古物」であっても、一通りの〝品格〟を備えている。しかも、夏の季節に応わしく、好物の「冷奴」に「青紫蘇」――結婚生活の体験を持たない一葉の筆致としては、この行きとどいたかしずきぶりの描写(7)は間然とするところがない。そして、何んとしても「源七」を〝正常〟にもどそうとする「お初」の努力は痛々しい。その一例として、いま述べて来た世話女房ぶりは勿論であるが、さらに「源七」の〝病〟を見抜いている「お初」の次のことばは痛烈である。すなわちそれは、「男らしく思ひ切る時あきらめてお金さえ出来ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別荘こしらえて囲うたら宜しうございましょう。最もそんな考え事は止めにして機嫌よく御膳をあがって下され…」とつづく「お初」の言辞は、暗に皮肉まじりの抵抗ともとれるが、しかし、いくらことばの上とはいえ、痛苦の響きがあり、夫「源七」を常軌に戻そうとする「お初」の苦悶の姿勢に他なるまい。

以上のような「お初」の必死の哀願にもかかわらず、実効の見通しの程遠い「源七」であるが、「こんな可愛い者さえあるのに、あのやうな狸の忘れられぬのは何の因果か…」と一応の反省が見られるのは注目される。前田氏も前掲の論文の中で、「太吉に対する情熱から我身の所業への悔恨を誘い出される一瞬があることに注意」と指摘し、さらに「そのかぎりで太吉がお力から菓子袋を受けとる些細な事件が、お初と源七に決定的な破局をもたらす第七回の設定はきわめて意味深い」（同掲）とみるのは極めて適切な視点といわざるを得ない。

四

ところで第四章に見られたように、「お初」の文字通りの〝良妻賢母〟的なかしずきぶりと、必死の説得は一見、効を奏したかに見えた。しかるに、第七章に至ってこの「源七」の〝決意〟も敢えなく

の柵飾りもむろんない。これらすべては、「お前が阿房を盡くしてお力づらめに釣られたから起こった事」―その意味では「お前は親不孝子不孝」と、さすがの「お初」も己れのことばに逆照射されつつ冷静さを欠いた言辞へとエスカレートしていく。そして、さらに、「お初」は漸層的に「源七」をせめて行かざるを得なかった。十年もつれ添って子供まで儲け、自分は「心かぎりの苦労」、子供には「襤褸を下げさせ」、家は「六畳一間」の「犬小屋」同然、世間一体から「馬鹿にされて別物」扱い、この隣近所の十軒長屋でもこの一軒だけは「除け物」―男は外出しがちで「隣近所」のことはわからないだろうが、「女心には遣る瀬なきほど切なく悲しく、おのづと肩せばまりて朝夕の挨拶も人の目を見るやう情なき思ひ…」と、家の内外隅なくの落魄ぶりを一気にまくし立て、これらの一事が万事、その源を辿るとすべてが「お力」に心奪ばわれた夫「源七」の不甲斐なさ…というより「お力」こそその元凶とばかり憎悪の炎を燃え上らせていく「お初」であった。

このような鬼気迫る「お初」の諫言と愚痴と憎悪をこめたことばは、必死であるだけに現実感を呼びおこす。しかし、「お初」にはこれが「源七」との重大破局の導火線的作用へ転化していくことを予想するだけの予裕はなかった。のみならず、その破局への導火線への点火は己れの手によってなされる結果となった。すなわち、夕闇迫る裏長屋へ、「お力」の〝志〟であるカステラの袋をかかえて「莞爾」として駆け込んできた「太吉」を契機に爆発した。今まで生彩を失なっていた「源七」が、「菊の井の鬼姉さん」が、しかも「何処かの伯父さんと一諸に来て…」云々の太吉の言によって一変した。加えて「お力」の〝真情〟ともいえるカステラを「お初」が溝へ捨てたことが更にこれを促進した。もうここは、「お力」の幻影を払拭し、忘却しようとして輾転する「源七」の姿は存在しなくなった。のみならず「源七」をして「お力」の「真情」の琴線に触れさせ、加えて「結城」をめぐる嫉妬の情念も複雑に絡みあって、逆に「源七」を蘇がえらせる結果となってしまったのである。そしてついに、「お初」との破局を決定的ならしめる結果にもつながるものとなった。すなわち、それは、「い、加減に人を馬鹿にしろ、黙っていればい、事にして悪口雑言は何の事だ…知った人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何が悪い！お力が鬼なら手前は魔王…」にはじまる「源七」の激昂は常の「源七」ではない。特にここで注目しなければならないのは、「源七」が「お初」に対して「出て行け…」の一言である。それだけでない。「貴様が出ずば」、「俺が小憎を連れて出やう…」という太吉を介在してのことばである。「お初」は事が予想外の方向に展開していくことに狼狽しながらも、なおこれはことばの上の事であって欲しいと期待を抱きながら、「お前はそんなら真実に私を離縁する心かえ…」と確かめざるを得ない「お初」であった。「源七」の激昂が、激声の中はまだ救いがあった。しかし「太吉を連れて…」云々となるとリアリティを伴う。「お初」は、「口惜しく悲しく情なく、口にも利かれぬほどこみ上ぐる涙を呑み」ながらも、結局、「詫び」の守勢に転じなければならなかった。「源七」とて、「太吉」を連れて…とは言いながら、もとより前途に生活設計があろうはずがない。いって見れば、本能的衝動にも似た形で、「太吉」を意識したに過ぎないであろう。それだけに「お初」は「源

潰えてしまうのは一体何によるのであろうか―。

まず、第一点として、第三章に描かれるように、「お力」が「結城朝之助」と席を共にしている最中、「源七」と思ぼしき人物が「お力」の許へ来訪…それを「お力」はにべもなく素戻しする場面がある。「お力」は「結城朝之助」の詰問に対し、「…何も今さら突き出すといふ訳でもないけれど逢っては色々面倒な事もあり、寄らず障らず帰した方が好い…」という述懐がある。このことばは、一見冷徹な響ともとれるが、しかし、「お力」胸中の苦悶が微かに聞こえてくるようにも思われる。そして、その延長線上に「太吉」と思ぼしき子供が「水菓子屋」で桃を買うのを垣間見て、「…可愛らしき四つ許りの、あれが先刻の人のでござんす。あの小さな子心にもよくよく憎いと見えて私の事をば鬼鬼といひまする、まあ其様な悪者に見えまするか…」との「お力」のしんみりとしたことばには真実の響きがある。そして、さらに「お力」が、「空を見あげてホット息をつくさま、堪えかねたる様子は五音の調子にもあらはれぬ。」という説明によってより一そう肯づくことができよう。

第二には、「無題二十二」との関連である。ここでは「お力」が「結城」を強引に泊めた翌朝の場面が示される。その一部を引用すると、

「何で結城さんがゑらイ人であろうか、かしこい人であろう。ついーとほりの男の一人、あのこすさうな眼つきを思ふても素姓は何であろうか知れた物ではなし、つまらぬくだらぬ馬鹿〳〵しい、何といふ私の心か、これが夢であれば善いが…」と起死回生を「結城」へひそかに託した「お力」の悲願も、けっきょく、槿花一朝の夢に過ぎなかったとする「お力」の独白的なことばがある。そして、そのような自己嫌悪にも似た心境に陥っている矢先、「向う横丁の角に立って此方を一目睨みたる人、それをとみるより俄に恐ろしく成りてはた〳〵駆けこみて腰障子をびしゃり…」といった「お力」の狼狽の場面がある。つまり、これは、「お力」と「結城」の関係を目撃し、嫉妬に炎を燃やす「源七」像を暗示したかったものと推定される。したがって、その「無題二十二」の内容を背景に捉えた上で第七章を整理してみるとある程度納得がいく。とにかく、わたくしは、「にごりえ」全編を通して、最も迫力があり、読者を惹きつけるのはこの第七章であり、中でも説得力を持つものは声涙共にくだる「お初」の苦諫のことばと思う。すなわち、夫「源七」の病気は「気」からくるもの、したがって医者ではなおるものではない、「気持を持直せば何処に悪い処があろう。少しは正気になって勉強して下され」云々と「源七」を諫める。そして、「酒でも気まぐれに呑んでみたい」という「源七」の生計を顧みないことばに対し、「お初」が朝から夜にかけての懸命の内職で「十五銭が関の山、親子三人におも湯も満足に呑まされぬ中で酒を買へとは能く能くお前無茶助になりなんした…」なる「お初」のことばは、一見穏やかに聞こえるがこれには実感がこもっている。たしかに、一葉自身の原体験からいっても、当時、女性の内職で家計をささえることがいかに至難の業であったか―。一葉一家が隣近所の洗濯や縫い物をしても、ひと衣の縫い賃七銭、夏物になると二、三銭が関の山…これが実態であった。したがってここに「お初」を通して一葉の、生活の糧を得ることの苦しみが、慟哭にも似た響きをもって語られている。そして、お盆というのに、子供に白玉も食べさせられず、ましてや「お精霊さま」へ

七」のただならぬ様相を感じとったのに相違ない。「お初」も最後のきっかけを「太吉」にかこつけ、「源七」に前言の取り消しを哀願するが、「物言はず壁」となった「源七」には取り付く島もない。進退極まった「お初」は、なおも「太吉」の事を念を押しながらも、押し入れの中から「小風呂敷」を取り出し、「太吉」の「寝間着の袷」、「はらかけ」、「三尺」などをかき集め、九尺二間のあばら屋とはいえ、親子三人の生活に終止符をうって夜の巷へ「太吉」の手を引きながら出て行く…。「お初」は一体何処へ行くのであろうか。

なお、この章の結びの部分について、村松定孝氏が、『お初』の行き先を度外視して、何ら道義的解決をあたえぬままに、ピリオドをつけたところにこの小説の新しい意図があった」(評伝樋口一葉・実業之日本社)という見解がみられるが、次の章で一括考えたいと思う。

五

明治二十七年二月二十三日、一葉は「秋月」という偽名を用いて観相家久佐賀義孝を訪問した。これは言うまでもなく、まさしく起死回生をこの一縷にかけてのことに他ならない。

爾来、絢余曲折を経ながらも一年有余に亘る久佐賀との接触は、明治二十七年一月一日付の「時事新報」、同年一月十五日付の「東京朝日」掲載の観理学会本部長権大教正佐藤観元の広告、また、同年一月十三日付の「時事新報」掲載の大教正木嶋大照斎等の単調な広告に比べ、同年二月十一日付「東京朝日」六面をほとんど網羅した、しかもにぎにぎしく、かつ説得力に富む顕真術会本部長久佐賀義孝の広告に魅せられて、その後、「身体」を交換条件に経済援助を主張する久佐賀の俗物性に憤怒しながらも、なおも諛辞媚態を巧みに、かなり大胆、かつ緩急自在に接触をつづけていった一葉の危険な綱渡りは、久佐賀からの援助の期待と同時に、一葉を一人の〝女〟として執拗に追いまわす—この久佐賀は全国数万の会員を擁し、後藤象二郎と思ぼしき人物を後援にしての活躍ぶり—しかもその久佐賀は一葉が従来まで接触して来た男たちとはおよそ異質のタイプ。つまり、男の体臭芬芬たる野性味を備えた男—一葉としてはまさに〝女冥利〟につきるものがあったのではなかろうか。したがって一葉は、久佐賀を通してその作家的嗅覚からもこれらを作品素材の対象として把らえていったと考えられる。—その一視点とて「にごりえ」における「結城朝之助」の像型の一因として影響を与えた—この点に関しては、拙稿「一葉後期文学の一側面—久佐賀義孝問題の再検討—」で一部触れたが、いまでもこの考えは変わらない。

さて、以上のように一葉は、時には久佐賀らを手玉にとって翻弄し、危険な綱渡りを敢えてした。これほどのリアリティはまずなかろう。加えて、「幸作事件」によって一葉は、前途に迫る己れの暗い影をいやが上にも意識せざるを得なかった。したがって一葉の原体験、そして意識内容や感情が「にごりえ」に投影しているとするならば、作中人物中、誰が最もリアリスティックな色彩として浮き彫りされてくるであろうか—。わたくしはこれを、「お初」と断じたい。もちろん、「お力」には一葉の抱くある「志向性」は託されている。しかし「お力」には、「源七」にせよ、「結城」との関係にせよ、他力本願的な甘えが存在する。換言すると一葉の口説きの一世界も

見られる。ところが「お初」にはそれが全く無いとはいわないが、しかし、何んとしても「太吉」を連れて己れの運命に立ち向かっていかねばならぬ。もちろん、「お初」像の分析には、小野芙紗子氏の「お初が、人間としてお力を見、源七を見ることが出来たら悲劇は起こらなかったかも知れない」（「樋口一葉—人と作品」。明治書院）という「お初」の限界を指摘する論。また、浜本春江氏が、一葉は「その時代の家庭のありようというもの、またその基盤にある、女性の三界に家なき状態というものが、限りなく女性を不幸にしている事実を描いていると思われる」（「樋口一葉研究—『にごりえ』を中心に」）とみる両氏の分析を以ってしても、抽象的かつ、広いカテゴリーとしては納得できても未だ何か釈然としてないものが残る。先にも一部述べたように、わたくしは久佐賀問題などを検討していくうちに、一葉の容易ならざる極限状態を一そう痛感した。一葉はもっともっと追いつめられていた。そして迷っていた。一葉は「未定稿」を含めて「源七」[8]像には筆が走っていない。その上、描写があいまいである。現在は零落の身とは云え、どう考えても「お力」の心を繋ぎとめる魅力はない。「お力」はある「大望」を夢想していた。しかし、反面にまた至近距離的なものとして、いわゆる「家庭の妻の座」も暗に描いていた。これも「にごりえ」系の未定稿から想像するに吝ではない。したがってそのような意味から「源七」を〝家庭〟という一概念として把握するのは余りにも極論というべきであろうか。

ところで、これに反して「お初」の描写は生彩がある。特に、第七章の結びの部分、すなわち「離縁」、そして「家を出る」ことに〝臍〟を固めた後の「お初」の強さ、ふてぶてしさ、一言のお詫びもない。ここには糠味噌くさい長屋女房の片鱗すら影をとどめない。まさしく今日的ウーマン・リブの原型を見る思いである。したがって、そのような意味からも、自棄的に運命に流される「お力」を乗り越えたとさえいい得るのではあるまいか。むろん、「お力」も一葉の投影である。しかし、あくまで「生」を希求する「お初」—そこに一葉が現実の疲労困憊の極にあってもなお生きつづける己れの強さを「お初」に、そして「大望」を抱きながらも過酷な運命に抗いかね、流れに身を投じたい女としての弱さを「お力」に—、結局、一葉自身の二面性をこの「にごりえ」を通して真底から吐露したかったのではなかろうか—。

以上、「にごりえ」の一視点として「お力」と「お初」の位相を中心に検討してきた。もとより、極論であって、従来説を全く否定するつもりはない。ただ、先にも述べたように、従来は比較的影の薄かった「お初」に対してスポットライトをあててみたのに過ぎない。その意味で本稿は文字通り試論であり、かつ序の章である。

注

(1) 「にごりえ」論・（〈昭和45・9〉「樋口一葉研究」所収）

(2) 前田氏が評価する塚田論文とは、前田氏も引用しているように第五章における「お力」が宴席を飛び出し、苦悶輾転する場面で、すなわち、「この部分に描かれたお力の危機感は、恰も心電図に現われた鼓動のひとつひとつを確かめるように、感情の振幅の微細な度合いまで描き出されている。高潮とした激情の起伏に伴う切迫した呼吸が耳に入るような克明な心理描写が、明治二十八年二十四歳の女性によってな

されたことに、再び文学の冷徹な眼を思わずにはおられない。」（『にごりえ』考・『誤解と偏見』―樋口一葉の文学―）とは、「意識の上の崩壊と諦観の姿勢と、無意識下に未だくすぶっている反抗の意志とが真二つに裂け」る激越な心情を無我無中に吐き出し、虚空にぶつけていく描写は塚田氏の指摘通りで間然とするところさらにないが、それだけに、結城朝之助の「お前は出世の望むな―」以降にみられる「お力」の「気負い」にも似た激情と陶酔との消滅の筆致はどのように脈絡づけるとよいのであろうか。

(3) 「樋口一葉研究―『にごりえ』を中心にして―」〈昭和44・7〉名古屋大学国語国文学・第24号）

(4) 「にごりえ」の結末―つまり「お力」と「源七」の心中のうけとめ方に、塚田満江氏は、「お力」が三代にわたる惨憺たる現実に身をもって抵抗いつづけた苦闘の心的経路が濁り江に染みつつ人間の真を見つめる娼婦らしからぬ目覚めた魂の持主となり、それゆえにつきまとう源七を厭いつつ無意識下に恋いつづけ、朝之助を恋いつつすがりよることを厭う厳しい自恃の念を併せもった複雑な個性を作り上げている。その二律背反の魂の葛藤の果てに死に到った一筋の推移は、作者一葉の生そのままに投入することに成功した結果にほかならない。生前の一葉をよく知る人、馬場孤蝶がまず、無理心中か他殺のごとくさやかれている噂はあくまでも噂であり、一葉は合意の心中とみている、と断言したことに私も賛意を表する…」（『今戸心中』と『にごりえ』・「『誤解と偏見』―樋口一葉の文学―〈昭和42・9〉所収）という説を立てている。一葉の「生そのままの投入」については異論がないが、それは「お力」のみでなく、「お初」の位置も合わせて考える必要があるのではなかろうか。

(5) 「一葉文学にあらわれた女性像」〈国語国文研究～北大国文学会編第36号〉

(6) 「一葉文学における近代的自我―『にごりえ』・『十三夜』を中心に―」・〈札幌大学紀要・昭和43・3〉

(7) 塚田満江氏は、「一葉の近代性」・〈誤解と偏見―樋口一葉の文学―〉の中で、この「お初」の描写について、「『にごりえ』に於ける源七お初の夫婦の間柄は、別れるべき心理的必然性がそれぞれの内部にあることを一葉はさりげなく示してくれる」とし、さらに、それは「お初」の「日常的な心遣いがこまやかであるほど、ひとを恋うる一念に憑かれている源七を素通りして、逆にお初の知らない焦躁感を唆る結果になるという空しい夫婦の間である。」と指摘する。たしかに「お初」のかしずきぶり、また諫言は「源七」には達し得なかったのも事実であるが、一葉の「お初」像型は単にそれだけであったであろうか―。少なくとも源七には一度は翻意する場面が存在する。一葉は己れの分身を「お初」にも仮託したとするならばどう考えるべきであろうか。

(8) 「源七」像の比重について、塚田満江氏は、「『にごりえ』に打ち込んだ本格的な文学創造の一葉の悲願に立って、全篇の構成と内部から見直すとき、源七に割かれた一葉の関心と愛着の比重は、お力へのそれと等分して差支えないとみられる。」（『にごりえ』考～誤解と偏見―樋口一葉の文学―所収）という説があるが、本校でも触れるように、私はいささか視点を異にする。

追記

本稿を書き終えた後（へ「にごりえ」の構想と「心の闇」〉・国語と国文学・昭和51・1）という伊狩章氏の論文に接した。一葉文学成立に伴う先蹤文学として古典の影響は当然ながら、近くは紅葉・露伴の関係は注目しなければならないものであった。なかでも紅葉については、桃水が己れの力の限界を認識し、何んとかして一葉を紅葉に接近させるべき奔走し、ようやくその実現の契機を見出したのが明治二十五年六月七月の日記の項に出てくるわけである。しかし、「荻の舎」での〝酬聞〟がこの実現を阻んでしまった。だが、この機会の喪失が、一葉の多分に衝動的、感情の揺れに起因したものであっただけに、失なわれたものに対する悔

恨も大きかったに相違ない。したがって一葉本来の負けじ魂のような闘志が、自らの力によって紅葉〝接近〟を考えなかったはずがないであろう。日記の記録によれば例の「にごりえ」執筆の契機とも考えられる川上眉山やの来訪後〜つまり明治二十八年六月七日「……馬場、平田、川上の三君来る。紅葉の男ごころ、および心のやみ、珍本全集などかさる……」という伊狩氏の指摘は、「にごりえ」成立構想論の構築には素通りできない重大関門といわねばなるまい。ただ、これらがどのように「にごりえ」構想に投影しているのか—伊狩氏の精緻にしてユニークな分析と論証は十二分に設得力もあるし、大いに示唆を得たが、いずれ稿を改めてこの問題を考えることにしたい。

後　記

本稿は、野田教授退官記念論文集の拙稿〈「にごりえ」における「お初」の位置〉を補稿したものである。当論文集は編集上の都合により、二十枚という制約があった。本稿はこれに二十五枚を加えて四十五枚とした点、ご了解をいただきたい。

（一九七六・一）